

「生命尊重」の思想と実践

——現代インドにおけるゾロアスター教とジャイナ教の場合——

田 中 か の 子

1. 問題の所在

かけがえない生命の価値を認め、生命を守り育もうとする思想は、教義上の相違にもかかわらず諸宗教のうちにみることができ。それは、多様な歴史的・民族的・文化的背景をもつて生い立つ人々が、「この世」という共通の生きる場において、互いの生命を尊重しあうことの正しさを証しているのではないだろうか。核兵器の脅威や自然破壊の惨状に直面している現代において、「この世」が輪廻転生の場であったり、神の国に到る過渡的な世界であったりする宗教的世界観の矛盾は、もはや問題ではない。問題なのは、「いま・ここで・生きている」という実感と「この世」の現実を、それぞれの宗教を生きる者が真剣に受け取め、自他の生命を守り育むことに努力しているかどうか、である。

本稿では、「この世」の舞台を現代インドに求める。インド亜大陸は、人類の歴史のなかでも最も大規模な諸民族の移動・分化・融合がおこなわれた場所のひとつである。そのうえ、ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教、シーク教などの形成と発展を促し、ゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教、イスラームなどの外来宗教との千数百年にわたる交流の歴史をつうじて諸宗教共存社会の貴重な実例を示してきたことでも注目し値する。特に、今世紀におけるゾロアスター教徒とジャイナ教徒は、インド国民総人口のわずか1パーセントにも満たない少数派ではあるが、自然保護・教育・社会福祉等の推進によって生命の福利をはかる目覚ましい活躍をしてきた。異なる「生命」観をもちながらも、「生命尊重」の実践という共通のテーマにおいて両者の「共生」が確認される。その事実を以下の各章で観てゆくことにしたい。

II. 『ヤスナ』にもとづく福祉事業

遠く遡れば『ヴェーダ』(Veda)の宗教と起源を共有するイラン系アーリア人の宗教・ゾロアスター教は、サーサーン朝ペルシャの国教となったのを最盛期として存続する世界最古の啓示宗教である。イスラームの台頭以降、信徒の殆どは民族的遠縁にあたるインド系アーリア人の支配する国に亡命し、インド社会への忠誠と貢献を約束した。⁽¹⁾ 主な定住地であるグジャラート州の伝統的慣用語で「パールシー」(Parsi、「南イランの」パールスから来た人)と呼ばれてきた彼らの福祉事業に言及するまえに、「生命尊重」をめぐるゾロアスター教の思想的立場を論じておきたい。

『ヤスナ』(Yasna)とは「(神への)礼拝と奉仕」というその語義が示すように、聖典『アヴェスター』(Avesta)の中枢部をなす神事書のことである。預言者ゾラスシュトラ自身の讃歌『ガーサー』(Gatha)を含むため、最も神聖視されてきた。なかでも『ヤスナ』三〇・三―四は、ゾロアスター教の生命倫理を端的に物語る箇所である。⁽²⁾ それによれば、太初に存在した二つの霊が遭遇し、それぞれが「生」と「非生」を創造した。つまり、二霊の対立は生命の創造と破壊をめぐって始まった。思考と言葉と行ないにおいて二霊はそれぞれ善と悪である。生命の創造者を「善」の霊(Spenta Mainyu)とし、正義(Asha)の道を整える者として讃える一方で、生命の破壊者は「悪」の霊(Agra

Mainyu)として呪い、世界の終末における審判の応報を説くという聖典の論理が展開されてゆく。それは、善悪の倫理規準を生命の絶対的価値におくことで、「生」の起因者たる霊(Mainyu)としてのアフラ・マズダー(Ahura Mazda、「叡智なる主」)を唯一神とするという信仰の宣言にはかならない。そもそも、「生」があつて初めて「非生」という事態に遭遇するのだから、「生存」の主導権を握る「善」に対して「悪」は二次的な関係にあるということになる(善悪の対等でない規範的二元論。敵対する二霊の闘争がアフラ・マズダーの勝利をもつて終結し、万物が最悪の死を克服し完全な共生を始めるという世界観の背後には、「善」なる創造者に対する生命体の絶対的信頼の姿がある。「マズダー(の道)を選ばしめよ」(『ヤスナ』三〇・五)と預言者に呼びかける神の声は、ひとりひとりが神に生かされて・いま・あるということに目覚めるのを期待しているのである。

ゾロアスター教徒の信仰告白文「わたしを(悪から)救いに来て下ろし、マズダーよ、Usa me awanghe Mazda)は、「善い思考」(humata)・「善い言葉」(hukhta)・「善い行ない」(huvasha)の三徳に悪を駆逐する呪力を込めるマンストラ(Av. manthra; Skt. mantra)である。三徳につづいては、争いと暴力を拒絶することが神の正義に到る道として宣揚されている。ここで思い出されるのは、「福祉」という言葉が生命の「さいわい」「幸福」「消極的には生命の危急からの救済」「積極的には生命

の繁栄⁽⁵⁾」を意味するというのである。ゾロアスター教の立場をふまえれば、「善」なる神アフラ・マズダーの創造した生命を脅かす破壊靈アンラ・マニユとの戦いに参加することが、福祉活動に向かう主動因となるのである。「生」を享けた者が「生」の本領を発揮する権利や機会や場を奪われることは、創造主たる神の御心・善い意図⁽⁶⁾ (Vohu Mana) に反する。逆に、「生」ある者を守り育むことは、いわば「この世」に「神の望ましい統治」⁽⁸⁾ (Khashtra Vairya) を実現する「正義」(Asha) のいとなみである。キリスト教の「山上の垂訓」や「主の祈り」にも比せられる最も重要な日々の祈り「ヤサー・アフー・ヴァイリョ」⁽⁹⁾ (Yahū Ahū Vairyo) は以下のように謳われる。

主なる神がその意志を望ましく実行するように、預言者たる者は義しさをもって行動する。善い意図をもつてマズダーのために働くのは、貧者の牧者たるアフラ（マズダー）の王国を受け継ぐことである。⁽⁷⁾

慈善を尽くして神に仕えることを生活の基本とするゾロアスター教徒は、法律、医療、教育、自然科学、そして産業の各領域で活躍することを好む。それは、これらの仕事から得られる叡智や富の力が自然界と人間社会における福祉事業に役立てられるからである。

例えば、世界自然保護基金インド支部 (World Wide Fund for Nature, WWF-INDIA) は、パーシーの設立したピロージ

シャ・ゴッドレジ国土管理センター (The Pirosha Godrej National Conservation Centre) と緊密な協力関係にある。センターの財源は、石鹼、衣装箱筒、冷蔵庫、食料品といった日常生活に関するおよそすべての製品を手がけるゴッドレジ・グループの寄附金によって賄われている。WWF-INDIAとの協同作業は、(1)生態系のバランス維持、(2)生物の多様な種の保存、(3)天然資源の有効利用、(4)資源の浪費・汚染の抑制、(5)インド社会における多様なライフ・スタイルの尊重と援助を使命としている。これらは、神の七大創造物、空・水・大地・植物・動物・人間・火に崇敬の意を表するための「ヤスナ」一・一六 実践項目と見て取れる。

WWF-INDIAの後援者でもうひとつ顕著なのは、やはりパーシーの企業資本による鉄鋼会社ターターである。設立者のJ・R・D・ターター(一九〇三—一九九三)は、その晩年(一九九一年)に夫人テルマと共に、社会福祉事業の総決算として「J・R・D・&テルマ・J・ターター・トラスト」(The J.R.D. and Thelma J.Tata Trust)を創始した。その翌年には、インドの人間国宝にあたる「バースト・ラトナ(インドの宝)」勳章を受章している。トラストの主な目的は、インド社会における学校教育、保健衛生、リハビリテーション、女性の地位向上、子供の人権擁護に関して援助の手を差しをべることにある。より善く生きてゆこうとする人間の意志と努力を支える仕事は、先述した「マ

ゾダーの道」を整えることに直結する。

以上のように、ゾロアスター教における「生命尊重」の思想と実践は、「生命の主」(「ヤスナ」三〇・九)たる唯一神アフラ・マゾダーに対する信仰を要としている。信徒たちはその富を福祉事業に投入して惜しまない。しかし、その恩恵を受けている非ゾロアスター教徒の間にゾロアスター教的な福祉の精神を説きひろめるということはしない。それは、世界最古の啓示宗教が、神信仰を説く他の一神教や多神教との相対関係のなかで会得してきた「この世」での処世術にもとづくものといえよう。これに対して次章で論ずるジャイナ教の場合は、諸宗教の共存するインド社会に対して、より積極的に精神的な働きかけをしてきたといえるのである。

Ⅲ・「アヒンサー」と「アヌヴラト」⁽¹⁰⁾運動

「この世」に「生」を享けたことを輪廻から解脱できないでいる迷いの生存と観るジャイナ教は、清浄無垢な精神原理・靈魂であるジーヴァ(Jiva、活命)がカルマ(karma、業)の束縛から脱した状態に真の生存のありかたを求める。それを達成できるのは、五つの大誓戒(pañca-mahāvratā)・すなわち不殺生・非暴力(ahiṃsā)・不妄語(satyā)・不偷盜(asteśyā)・不所得(aparigraha)・不邪淫(brahmacarya)を完全に実践して身口意の制御をなした出家修行者にかぎられる。なかでも「アヒン

サー」は、ジーヴァに悪しきカルマの微細な物質が漏入するのを防ぐための最も基本的な実践項目(ahiṃsā parma dharma)である。ものの生命を奪わぬよう口覆いをし、箒で地を掃きながら裸足で行脚する修行僧の姿はよく知られている。在家の修行者は、かの大誓戒を世俗の生活に適応させるべく再構成された小誓戒(anuvratā)を守りながら修行僧の共同体を養ってきた。第二十四代目の祖師にして歴史上の開祖ともいわれるマハーヴィーラの時代からこのかたジャイナ教の根本教義に変わりはないが、世紀以降、戒律に関する解釈からいくつもの分派が形成されてきた。まずはディガンバラ(Diḡanbara、裸行派)とシュヴェターンバラ(Svētāmbara、白衣派)に大別される。前者に比べ後者の方が活動的で、女性の出家修行を可能にしたのはいうまでもない。後者のさらなる三つの分派は、「アヒンサー」をめぐる興味深い相違を示している。起源の最も古いマンディールマルギー(Mandirmarg、寺院派)は、仏教寺院における像崇拜の影響を受けて、二十四人の祖師(Tīrthankara)たちの坐像を祀る寺院をもつ。像は、ジーヴァの清浄さを思い出させるための媒体である。しかしその存在は供え物をする行為を招き、飾りとしての花を手折って来させるといふことになる。第二の分派スタンカヴァーシー(Śtānakavāsī、会堂派)は、十五世紀末、あらゆる偶像の制作・礼拝・供養を非ジャイナ教として拒むことにより成立した。がらんとした会堂に集い、マハーヴィーラの教

えに忠実たらんとする厳格主義をもって自らを任ずるところに特徴がある。

以上の二派は、出家者も在家者も、ジャイナ教の生活規範をジャイナ教徒の社会の範囲内でのみ価値づけることを自明の理としてきた。そして、高德の修行僧が各自の弟子を取って小規模な出家集団をかかえているのも共通している。¹² このように保守的で統一のとりにくい状況下にあるかぎり、少数派のジャイナ教徒がインド社会に、また世界に向けてジャイナ教の精神的遺産を開示する機会には恵まれなかったであろう。この点を予見してスターナカヴァーシーから分かれたのが（二七六一年）、「最初の」十三弟子」とも「汝自身の（往くべき）道」とも訳されるテーラーバント（Terapanth）の一派であった。創始者のビクシュ・スワミー（Bikṣu Swāmī, 1727-1804）は、自らを唯一のアーチャリーヤ（ācārya, 師）として出家・在家の弟子集団を統率した。彼の思想的特徴は、(1)真理の多面性（anekānta）を分けもつ「人それぞれ」の道¹⁴の実践を重視すること、(2)セクト・教義・儀礼に固執する宗教間の孤立主義や排他的言動に反対すること、¹⁵そして(3)「ダルマ」（dharma）の概念を、国政や富者の財力による福祉事業を意味する「サマージ・ダルマ」（samājī dharma, 社会の務め）と個人の精神的浄化と向上を目指す「アートマ／モークシャ・ダルマ」（ātma/mokṣa dharma, 自分自身の／解脱の務め）に分け、前者よりも後者にいわゆる「宗教」の本質を観ると

¹⁶ いうことなどに見出すことができる。

アーチャリーヤ・ビクシュの思想を最も効果的に実践してきたのが、第九代目のアーチャリーヤ・シュリー・トゥルシー（Śrī Tulsī, 1915-）である。一九四九年三月一日に創始した「アヌヴラト運動」（Anuvrat Andolan）は、¹⁷「子供から大人にいたる国民のひとりひとりがその分に応じたモラルの遵守を誓い実践することにより国家の発展をはかることを目指している」¹⁸。社会改革（Naya Modā）としての性格も持つが、その指導方針は禪定と節食により精神を安定（samata）させ、身口意の制御と「アヒンサー」の実践によって自制（samjama）をなし、結果的に自己／魂の浄化（Ātma Suddhi）をはかることにある。それは、自己を浄め人格の向上を望む人々が、階級・人種・宗教・国籍・言語の相違にかかわらず「アヌヴラティ」（Anuvratī）、すなわち「アヌヴラト運動」の参加者となりうることを意味する。他宗教との一線を画する業生輪廻の教説などとはもはや問題にされず、「この世」に生きるもの同士の調和と「他者」尊重が力説される。「汝自身をすべての他者に親で、何者をも害するなれ」²⁰という「アヒンサー」の教えを、殺生・暴力・破壊（「ヒンサー」）に對抗して善き人格と生活習慣の創造をすすめる積極的な行動原理に生まれ変わらせたのは、アーチャリーヤ・トゥルシーの大きな業績といえる。破壊と創造の対立をめぐる「生命尊重」の思想と実践という点で、創造神の存在を否定するジャイナ教もゾロアスタ

一教と共通の目標をもつことができるのである。「行ないの善き変化によりヒンサーを滅し、アヒンサーを体現しうることを信じ実践せよ」という「アヌヴラト運動」の呼びかけは、諸行無常の実相に進んで働きかけることでもある。こうした積極性のうちには、自己の本質に清純無垢な永遠の実体ジヴヴァ（活命）を觀るジャイナ教固有の生命觀・人間觀が伏在している。しかしそれは、生命を活かし守り育もうと努め、究極的には何らかの形で「永遠の生命」を信じ求める他の諸宗教との接点に事欠かない。

かつては在家のジャイナ教徒が守る小誓戒として知られていた「アヌヴラタ」を現代世界にアピールする普遍的な形におきかえ、国の内外におおくの賛同者を得たことは、ジャイナ教史における画期的な出来事であった。

アーチャーリヤ・トウルシーは一九四九年以来、いままではインド全土をおよそ五万キロにわたって行脚し、多様きわまる社会の情況に直面してきた。その鋭い洞察力と機転の利く智慧は、ジャワハルラル・ネルーやリーダークリシュナンをはじめとする政治家の注目を浴びている。一切の政治的支援を必要としない宗教者の立場を守りながらも、その歩んで来た道を讃えられて一九八六年には「バーラト・ジョーティ（インドの光）」の称号を授与された。「テラーバントの指導者、そしてジャイナ教の信者である以前に、より善く生きようとする一個の人間」であるという彼自身のモットーは、行ないによって打ち建てられるべき「宗教」

の本来的なありかたをよく物語っている。一九九五年二月五日、デリーで開かれた「マヤーダー・マホトサヴァ」(Maryāda Mahotsava、教団の倫理規範を改定・公表する大法会)において、アーチャーリヤの役割は、後継者(Vivacharya)のマハーブラギヤ(Mahābragya, 1921-)に譲られ今日に到る。

IV. 諸宗教共存社会の明日への展望

現代インドという共通の社会的状況の中で、異なる成り立ちをした二つの宗教が「生命尊重」の目標に向かって努力しているという事実。それは、「共生」や「平和共存」の希求される時代にあつて希望の福音となりうるものである。今日もみられる宗教間の不和や対立において最も致命的なのは、諸宗教に普遍的な「生命尊重」の思想と実践を最も等閑にしようことではないだろうか。初めにも述べたが、インドは諸宗教共存のきわめて古い歴史をもつ。いまに到るその良き実績に着眼することは、諸宗教共存社会のさまざまなありかたを予見し模索してゆくにあたつて有益である。現地での体験からそのように結論する。そしてこれからも、諸宗教の「この世」における協調の姿をとらえてゆきたい。

(1) その経緯や現代の信仰要理については、拙稿「フラヴァラーネ」による現代ゾロアスター教の基礎研究」(脇本平也・田丸徳善編「アジアの宗教と精神文化」新曜社、一九九七年、四三二―四四五七

頁) 参照。

- (2) 拙稿 “Yasna 30. 4 and its Educational Effects on the Zoroastrian Youth”, 6th World Zoroastrian Congress, Tehran, 1996, 44 の註釋 *Absence of the Buddha Image in Early Buddhist Art — Toward its Significance in Comparative Religion* —, New Delhi, 1997, pp.104-108, pp.131-133 参照。以下に聖典から引用した語や文は、文獻を参照のうえ筆者が訳出したもの。
- (3) 善神と悪神の対立という解釈は、ササーン朝期の異端 Zuvanism (ジルワーン教) に拠る。
- (4) その理想成就の日を「フラスィョ・ケレチヤ」(frashō kereti, 素晴らしき未来の日) と呼ぶ。
- (5) 以上の定義は、新村出編『広辞苑 (第三版)』、岩波書店、一九七六年、一九二七頁。
- (6) ‘Yohū Mana’, ‘Kshathra Vairya’, ‘Ashe’ na, 神の七大属性における主要なもの。(一) の拙稿参照。
- (7) ‘Yathā Ahū Vairyo Athā / ratush ashāchit hačā, / vanghush dazdā mananghō / shyaothanam angheush Mazdāt, / Kshathrēnchā Ahurāi a / yim drigubyo dadat vāstārēm.” *The Sacred Khordāh Avestā (Shahenshahi)*, Bombay, 1984, p.3 (Yasna 27.13). (一) の拙稿、四四〇頁参照。
- (8) WWF INDIAN’S MISSION, New Delhi, 1995, p.1.
- (9) *Dīpanjālī*, Delhi, June–December, 1994, p.23.
- (10) ‘anuvratā’ の語尾 ‘ā’ を省くことがあつた。
- (11) ‘jīva’ を造られる永遠の実体と観、‘karma’ を物質として実体視するジャイナ教の根本教義は、‘諸法無我’を説く仏教の‘自性清浄心’や‘客塵煩惱’などの一見類似した用語との明確な相違を打ち出している。
- (12) Cf. *Sadhvipramukha Kanakprabhā, Āchārya Bhikṣu’s Style of Discipline*, Ladnun, 1994, p.26.
- (13) Cf. *Kanakprabhā, op.cit.*, p.24 ‘verā’ na ‘[十三]’ と ‘ānata’ の区義がある。
- (14) Cf. *Yuvāchārya Mahāpragya, Āchārya Bhikṣu: A Revolutionary Visionary (Doctrine and Philosophy)*, Ladnun, 1994, p.5.
- (15) Cf. *Mahāpragya, op.cit.*, p.7.
- (16) Cf. *Mahāpragya, op.cit.*, pp.32-33.
- (17) 例えば、暴力場面や性描写のある映画を見せることの有害性を訴えている。 Cf. *Āchārya Tulsi on Contemporary Problems*, Ladnun, 1993, pp.50-52.
- (18) *Anuvrat Anushasta: Āchārya Śrī Tulsi, ANUVART—A Code of Conduct For Building a Healthy Society—*, New Delhi, 1992, p.5. 学生、教師、商人、役人、会社員、議員選挙の立候補者、投票者といった各々の立場における小誓戒が設けられている。
- (19) 比較・ゾロアスター教における身口意の三徳 (II 参照)。
- (20) *Mahāpragya, op. cit.*, p.37. Cf. *Sattantipāṭha* 705, *Dharmapada* 129-130.
- (21) 比較・「主よ、私たちの目が兄弟姉妹の中にあなたを見出しませんでした。主よ、あなたの『靈』を今日も私たちにお与えください。あなたの名によって私たちが一つの心、一つの魂となれますように。アーメン。」(マザー・テレサ) ドン・ボスコ社の一九九八年カレンダーより。
- (22) *Yuvachārya Mahāpragya, Nonviolence and Its Many Facets*, Ladnun, 1994, p.7.

ナ様——、岩波文庫、一九八五年、第六章の七、一五八頁。

- (23) Cf. "bhāvabhīṃ vandanaṁ bhagavāna carapoṇaṁ meṁ caḍḥayeṁ/
śuddha jyotirmaya nīrāmaya rūpa apāne āpa pāṇe/-...",
Āchārya Tulsī, *Ārhat Vandana (Homage to the Ārhat)*, 1991,
p. 24 (朝夕の吟詠など)。

- (24) Cf. "The Atomic Bomb" (*New York Times*, May 15, 1950).

- (25) Cf. Āchārya Mahāprajña, *Steering the Wheel of Dhamma (A
Biography of Āchārya Śrī Tulsī)*, Ladnun, 1994, p. 275. Muni
Vijay Kumar, *Āchārya Tulsī, Man of the Age Epoch Mak-
ing-Personality*, New Delhi, 1994, p. 35, etc.

- (26) 本稿の記述は、筆者の滞印経験による知見を第一資料としている。

* 本研究は、平成九年度・公益信託大畠記念宗教史学研究助成基金に
よる研究成果の一部である。

(たなか・かのこ、宗教学、(財)国際宗教研究所研究員)